

海峰



学校長 西 裕之

卒業するということ

3月11日に、卒業生が「謝恩会」を開いてくれました。私たち教職員が卒業生の招待を受け、感謝の思いを伝えてくれる会です。先生クイズをしたり、合唱曲「365日の紙飛行機」を聴かせてくれたりしました。今年の6年生らしい一人一人の個性が生かされた、アイデアいっぱいの会でした。お礼に、私たち教職員は、私の世代ではよく歌われたスピッツの「空も飛べるはず」を歌いました。わずか3回の練習でしたが、ギターとウクレレと木琴の伴奏に乗せて心を込めて歌いました。子供たちの中には、涙を流して聴いてくれた子供もいました。「卒業」を実感して寂しくなったのかもしれませんが。大人になって、いつかどこかでこの歌を耳にした時、「そう言えば、先生たちがこの歌を歌っていたなあ」と小学校生活のことを思い出してくれたら嬉しいです。



人の生き方を竹（孟宗竹）の生長で例えることがあります。竹の子は、土の中から顔を出すと、ものすごい勢いで生長します。記録を調べてみると、1日に1mも大きくなることもあると言います。若竹は一気に背丈を伸ばし、所々で節を形成していきます。背丈は大きくなりますが、若竹そのものは瑞々しくて柔らかく、風が吹くとしなりながら大きく揺れます。竹が節を作るのは、しなりに耐えるため、その間隔は竹の高さによって違うそうです。そして、3～5年もすると、瑞々しさがぬけ、固くて強い竹に生長し、自分を支える太い根を地下に張り巡らせるのです。

人生には「節目」と呼ばれる時期は何度かあります。子供たちにとって、小学校を卒業することは、初めて経験する大きな節目と言ってもいいでしょう。それは、大人になる過程において、自分自身を支えるために必要なことなのです。節を作っては成長し、また節を作る、その経験を繰り返しながら大人になっていきます。竹は、土の栄養や水を吸収しながら生長していきます。では、人にとって、その役割を果たすものは何でしょうか。

卒業の歌「最後のチャイム」は、伴奏者を含めて7人で歌います。その歌詞には、子供たちの6年間の小学校生活と重なり合うところがあります。歌に思いを乗せ、ひたむきに歌う表情を見ていると、感情が高ぶるとともに、7人の確かな成長を感じます。そして、7人の子供たちの節目に携わることができることに責任を感じ、身の引き締まる思いでいます。

令和5年度もうすぐ終わりです。1年間、本校の教育活動に対し、ご理解とご協力をいただき、感謝申し上げます。令和6年度どうぞよろしく願いいたします。